

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 中川 裕



学位申請者 柳村裕（やなぎむらゆう）

論文名 「ラオ語の声調の音声的・音韻的構造と歴史変化」

【審査結果】

この論文は、ラオ語音韻論にとって極めて重要でありながら未解決の研究課題を多くもつ声調論を対象として、その音声学的な性質の解明を発展させ、音韻論的な構造を歴史的変化に注目しながら理解し、記述的および理論的な貢献を目指す論考である。音声的な観察や測定は精密な音響音声学的手法を用い、測定結果は適切な統計的処理を経て解釈を行っている。また、歴史的音変化の理解のためには Juliette Blevins による最新の歴史音韻論を声調の分野に拡大して独自の分析・解釈装置を提案している。さらに、ラオ語の声調類型が一般的声調理論にどのような貢献をしようかを探求し、声調索性理論の考察に挑んでいる。

研究テーマの妥当性、問題設定の明確さ、方法論の適格性、分析と解釈の枠組みの堅実さと斬新さ、新しい客観的音声データ分析に支えられた実証的価値、理論的研究に資する提案の独創性、いずれにおいても高い学問的価値がみとめられる。また論旨の展開や文章表現、図・表を用いた提示法なども明解で分かりやすく高く評価できる。

この博士論文は、東南アジア言語学にとってもまた一般的な音声学・音韻論の研究分野にとっても大きな貢献をなすものである。審査委員会は、論文審査と最終試験の結果、委員全員一致で、学位申請者である柳村裕氏に対し博士（学術）の学位を授与することが適当だという結論に至った。

なお、審査委員会は、中川裕（音声学・音韻論）を主査とし、学外から佐藤大和氏（音声学、前本学教授）と五十嵐陽介氏（実験音韻論、広島大学准教授）、学内から斎藤弘子教授（音声学）と鈴木玲子教授（ラオ語学・タイ系言語研究）を副査とする5名で構成された。

【論文の概要】

この論文は5章と付録とからなる。

第1章は序論として、まず、本論文の全体の理解に必要な最小限のラオ語声調を概観し、直接関連する先行研究を批判的に検討する。そしてそれを踏まえて、本論文が探求する重

要なトピックである声調の音韻構造分析における理論的問題「曲線声調を音韻論的にどのように理解すべきか」を、ラオ語研究の文脈で再設定する。つまり、曲線声調は複数の水平声調の連続と見る（「水平観」）か、ひとつの単位である曲線声調と見る（「形状観」）かという問題を、ラオ語に即して調査する枠組みを考案する。また、その問題が、後に考察する声調素性理論とどのような関係にあるかを単純明快に論じ、第4章の議論を予告する。さらに、この声調構造の分析において本論文が導入する新しい接近法（安定的音声特徴と歴史的音変化の重視）を解説する。

第2章では、本論文における主要な音響音声学的分析の結果が記述され、その音韻論的な解釈が詳しく論じられる。この章は「音声構造：声調の安定的音声特徴の解明とその理論的含意」と題するとおり、声調の音声学的な構造（時間的構造）を観察し、発話速度が変わっても安定的に実現する音声特徴を特定し、その事実から曲線声調の音韻的構造を探る。声調の時間的構造を解明するために綿密な測定方法を設計し、発話速度の違いによる変異の観察を可能とする録音サンプルの収集を行っている。分析の結果、声調の安定的音声特徴として(1)基本周波数の変化の始点・終点の時間的配置と(2)基本周波数の変化の傾きのふたつを特定している。

さらに、この結果が、水平観解釈と形状観解釈にとってどのような意味をもつのかを詳しく議論し、ある点では両方の見解が支持されるが他の点では形状観が支持されるという結果がもたらされていることを指摘する。この一見、一貫性に欠ける結果は、第4章における声調素性を用いた声調音韻表示によって解決される。

第3章「歴史的変化：方言声調体系の記述とその比較による音変化の仮説設定」は、ラオ語の声調におきた通時的な音変化を探ろうとする初期調査の結果を提示する。あくまでもパイロットスタディーであるとした上で、ラオ語の11方言変種の声調を記述し、歴史音韻論的な比較を試みている。比較の結果から再建される声調の歴史的変化の音声学の基盤についての仮説を、Blevinsの理論を声調に拡大することによって提案し、そのなかでもっとも重要なものをレジスターの変化（曲線声調が相対的ピッチのみを変えて形状を保持する変化）であると主張している。

第4章「音韻構造：声調素性を用いた分析」では、2章と3章の議論を総合して、そこに声調素性という理論的概念を導入する。そして、ラオ語声調論という事例研究が、声調素性理論にとってどのような貢献をするか考慮しながら、2章と3章が新たにもたらした知見を十分に用いて、従来の声調素性システムの検証を通してその改訂を提案する。また、素性システムの利用によってより妥当性の高いラオ語声調の理解を探求している。具体的には、(1)4段階の高さの区別の必要性から、レジスター素性の設定を提案し、(2)レジスター素性が歴史的変化の記述を明瞭にすることを指摘する。また(3)曲線声調の音韻表示に

は、水平声調連続解釈と同時にその声調連続を支配する声調結節点 (tonal node) を仮定する。そして(4)この声調結節点を用いた音韻表示が、矛盾をはらむようにみえる水平観解釈と形状観解釈の共起の問題を解決すると論じている。

第5章では本論文すべてを振り返り要約し、さらに今後取り組むべき残された問題について述べている。付録には、第3章で調査した11方言の声調の典型例の音響分析結果が視覚化されて掲げられている。

【講評】

審査委員からは、次のような肯定的な評価が示された。

この研究はラオ語の声調の音声的特徴に関して精密な音響分析を行い、各声調について安定して観測できる特徴を具体的に解明している。また11種の方言声調の音声資料を収集し、これらの声調分析から11方言の声調体系とその多様性を明らかにしている。従来のラオ語研究では音響分析に基づく詳細な声調研究はほとんどなく、その点でこの研究はラオ語声調の実証研究を大きく前進させたと言える。

また、より広く東南アジア大陸部における声調言語の研究を見ても、レジスター素性を用いて声調素性による音韻表示を試みたものは皆無であり、同言語群の他の言語の音韻解釈へのインパクトも大きい。また、声調表示に声調結節点 tonal node を導入した点は独創性に富んでおり、この地域の声調言語研究に一石を投じた論考である。

第2章のもたらした知見は、中国語の声調における同種の現象との平行性や、そしてその背後にある音韻構造の共通性を強く示唆する声調類型論的に重要な発見が含まれる。また、さらにラオ語・中国語の声調とヨーロッパの諸言語のイントネーションとの間に観察できる基本周波数の時間的構造の違いが指摘され、そのメカニズムに関する解釈が提案されている。これも類型論的音韻論への貢献である。

音韻理論の分野においては、アフリカの声調言語 (バントゥ語タイプ)、東アジアの声調言語 (中国語タイプ) の研究が、近年めざましい理論的発展に寄与してきた。一方、長い研究の伝統をもつ東南アジア大陸部声調言語 (タイ系語タイプ) の研究に基づく議論がこの分野でなされることはほとんどなかった。この論文は、音韻理論の分野でタイ系語声調タイプの研究が声調素性理論において貢献することを示すことに成功している。

論文の文章自体についても、問題提起から始まってデータをもとに検討を進める論旨は明快で、ラオ語の声調と特徴と興味深さをよく伝える「読ませる」論文であること、また、体裁についても形式が整っており、入力ミスがほとんど見られず、外形的にもゆきとどいた論文であることが肯定的評価として述べられた。

批判的見解としては、第2章の音響分析結果の解釈において、仮説の枠組みにとらわれず、より積極的な自説の展開を望む意見が出された。また、サンプルの問題が複数の審査員から指摘された。とくに、第3章の方言調査資料は、初期的調査で資料の不足とそれによる一般化の限界については柳村氏自身も繰り返し述べてはいるものの、本論文の弱点であることは否定できない。第4章での議論には比較的重要な役割を果たすものであるため、よりバランスのよい方言変種のサンプリングをすれば、声調変化の仮説はより確かなものとなり、本論文の学術的価値はさらに高まったはずである。柳村氏の今後の調査研究に期待したい。

このほかに、追加すべき参考文献の補足（特に第3章への補足）、声調変化の内的要因だけでなく言語接触等の外的要因の考慮が加えられるのが理想的である、声調の共時的な分布についての確認的記述を含める方が良い、例をいくつか追加する方が分かりやすくなる、などの助言的なコメントもあった。

【総合的判断】

以上述べてきたように、柳村裕氏の提出博士論文は、実証的側面と理論的側面のバランスのとれた独創的な研究である。サンプリングなどに関する不十分さはあるが、総合的にみてその学術的な価値は極めて高く、博士号取得にとって十分な高い水準を満たしている。最終試験における口頭試問では、論文の要点の報告が端的で明解になされ、当該論文の重要性が分かりやすく提示された。この報告および博士論文に関する審査委員からの質問にたいする回答も、すべて明確であり、自身の研究の学問的背景や価値や限界について良く理解をしていることを示す申し分のないものであった。

柳村氏は、言語研究の分野で学術的な貢献をなし得る高い研究能力をもち、将来にわたり専門研究者として十分に活躍できると判断される。したがって、審査委員会は、全員一致で、この研究が博士学位（学術）を授与するに相応しいものであるという結論に達した。